

平林たい子「施療室にて」

——プロレタリア文学と産児制限との関わりを背景に——

ミ
ヒ
ー
ル
セ
ン
エ
ド
ウ
ィ
ン
MICHELSEN Edwin

要旨

一九二〇年代に女性権利を代表する運動が登場すると同時に、女性のリプロダクティブ・ライツの闘争が始まった。その中、最も活躍していたプロレタリア婦人運動家たちは、階級闘争を女性権利と結び付け、女性の生殖権利を要求する無産者産児制限同盟（プロBC）を結成した。本稿では、無産者産児制限の言説と歴史背景を分析しながら、階級支配と性支配の統合を含めてプロレタリア作家平林たい子の「施療室にて」という短編を考察する。そうすることで、産児制限とプロレタリア文学との相互関係を検討する。また、「施療室にて」をプロレタリア産児制限論と併読しながら、プロレタリア作家たちは、どのようにジェンダーの搾取と資本主義において唯一生産できない商品である労働力の再生産の必要性を結びつけたかを示したい。

はじめに

一九二七年の『文芸戦線』の第九号に発表された「施療室にて」は一人称で語る社会主義者の北村光代と彼女の難産の物語である。東京の監獄の釈放後、光代は夫と日本本土から満州国に移住する。そこで夫は三人の苦力と争議を企んだが、失敗して警察に逮捕される。すでに妊娠している光代は妊娠脚気に罹ったため、刑務所から施療室に移動させられる。施療室にいる間、光代は夫との関係を反省し、夫の女性観を批判しながら、「良妻賢母」の家族制度という概念を問い直す。人工栄養のお金がないため、光代は一人で産んだ子供にやむをえず脚気の悪影響を受けた母乳を飲ませた後、子供を亡くしてしまう。

先行研究では、平林の初期作品におけるジェンダー、労働問題、満州国などの描写が注目されてきた。例えば、平林の「荷車」(『新潮』一九二八年六月)について、グプタ・スウィーティは、「労働問題」、「女性問題」、「母性保護の問題」、「乳幼児保護の問題」、「階層問題」などの「諸問題をうまく組み込」む作品であると論じた。⁽¹⁾ つまり、平林の特徴は、作品の中では無産階級に関する様々な問題や闘争を結びつけることである。岡野幸江は、「たい子の作品は、人間の自由の問題を階級闘争だけに還元するのではなく、また性の問題だけに焦点化するのでも、ナショナルな空間に限定するのでもない、むしろそれらすべてを統合したところから考えようとするダイナミズムをはらんでいる」と述べた。⁽²⁾ さらに、倉田容子は、「平林はたしかに女性作家や女性活動家を差異化した——ただし、(中略)それは女性を特権階級と無産階級に二分化したということではない——が、社会主義運動内部の差異も容赦なく言語化した。」と論じた。⁽³⁾ このように、階級、民族、ジェンダーとの相互関係が考慮に入れられるようになったが、なぜこう

いう問題が深く交わっているかについては触れられていないといつてよいだろう。平林はプロレタリア文学運動の一人でマルクス理論にも詳しくかったので、何よりもこうした相互関係への深い理解を持っていたはずである。特に、平林の初期作品で階級とジェンダーの問題を最も強く結び付けるのは人間の生殖である。プロレタリア運動もしばしば資本主義における生殖の支配を批判しており、その支配に対して産児制限を闘争の戦略として提起した。だが、先行研究では、人口問題と産児制限の歴史が解明されたものの、プロレタリア文学と産児制限との関係性が未だに論じられていない。マルクス主義フェミニズムでは、ジェンダーを階級や資本主義との関係を無視して考察するのは性別をただ均質なものとしてしまうと批判している。性差別における階級性と資本主義における性の創造と支配を無視するわけにはいけない。上野千鶴子はマルクス主義フェミニズムについて「階級支配一元説も性支配一元説もとらず、社会領域の「市場」と「家族」へのこの分割それぞれ自体を問題視する」と主張している。⁽⁴⁾ 言い換えれば、階級支配だけで、または性支配だけで、資本主義による様々な相関した搾取形態を解明できない。生殖もそうである。

本稿では、無産者産児制限の言説と歴史背景を分析しながら、階級支配と性支配の統合を含めてプロレタリア作家平林たい子の「施療室にて」という短編を考察する。そうすることで、産児制限とプロレタリア文学との相互関係を検討する。より詳細に言えば、平林の「施療室にて」が家長制の「良妻賢母」という理念に対して、どのように人間生殖の必要性を問い直したかを考察し、如何に主体性を問題にしたかを吟味する。ブルジョアの家族主義を否定し、身体そのものによって未知の主体性の可能性を探索する主人公光代が生殖の価値を再考し、生殖以外の女性の可能性を探求することがどのような意味を持っていたかに焦点を当てる。

また、「施療室にて」をプロレタリア産児制限論と併読しながら、プロレタリア作家たちは、どのようにジェンダーの搾取と資本主義において唯一生産できない商品である労働力の再生産の必要性を結びつけたかを示したい。「施療

室にて」は、資本主義が男性と女性の性差を都合良く利用している点を批判することで、プロレタリアートにおけるジェンダー間での連帯の難しさを見せる作品だと考えられる。こうして、平林たい子のようなプロレタリア作家たちは、妊娠と出産の苦しみを可視化して、世界中のプロレタリア運動における女性闘争が相互に通じあうようにした。ジェンダーの定義を再考することはプロレタリアートの中のジェンダー差別も乗り越え、新しい連帯の同盟を作り上げる試みであった。したがって、こうした無産者の身体は国民国家の民族や国語というカテゴリーに根付いたものではなく、むしろ、ジェンダーや階級的な苦労によって国際的に共通のものとなっていたのだ。

一 一九二〇年代における産児制限言説とプロレタリアート

一九三三年に発行されたプロBCニュース大衆版の第四号に「多産地獄から救われた 八木さん一家の話」という記事が掲載された。その中で、大島町に住んでいた八木さんは次のように語る。「今度子供が出来たら、私は死ぬ」。しかし、八木さんはペッサリーという避妊具を購入し使用してからも「大丈夫です。ほんとにたすかりました。」と無産者産児制限運動(プロレタリアアバーズコントロール、略称プロBC)の会員の取材で話した。八木さん(四〇歳)夫(四一歳)には七人の子供がおり、「経済的な困窮、精神的ナヤミ」で苦勞していた子沢山の家族である。七人目の子供を生んでからもう妊娠したくなかった八木さんはどうすればよいかわからないままずっと悩んでいたが、プロBCの会員から産児制限の方法を教えてもらい、それからもう子供を生まなかったのである。

ところが、避妊をあまりにも順調にできた八木さんの「実話」は、妊娠に苦しめられている多くの無産婦人と違っていた。ほとんどの無産婦人は妊娠を避ける方法もなく、違法な墮胎のためのお金もなかった。したがって、その女

性たちは給料が安い仕事をしながら、育児の仕事もするという二重負担を抱えていた。八木の経験を無数の無産婦人などのようにして同等のものともなせばよいであろうか。無数の出産や育児の物語は無関係に見えるが、それぞれの悲劇は世界中の資本制による人口抑制で相互接続されている。プロレタリアの女性は階級、ジェンダー、民族などで（男性の）植民地的・性的の多重暴力に遭遇する。プロレタリアの女性の間でそれぞれの異なっている経験の相関性を把握しない場合は、女性闘争の分裂が起きる恐れがあり、階級とジェンダーの連帯を阻碍してしまう。

世界プロレタリアートの分裂を防ぐために、プロレタリア運動は女性闘争を階級闘争と連携しようとした。その女性闘争における一つの重要な闘争は生殖と関わったものである。多数の妊娠に苦しめられている無産婦人たちが産児を制限すれば、男女平等だけでなく、階級闘争の全般を進めることになるという声が高まっていた。例えば、山川菊栄はいわゆる「出産ストライキ」の戦略を煽動し、帝国資本制の生命線である労働力の生殖（再生産）を無産階級の闘争に導入した。ヨーロッパやアメリカにおいて少子化がすでに進んでいたが、日本の人口が圧倒的に増加していた背景の中で、山川は「出産ストライキ」で産児制限の促進を狙った。⁽⁵⁾プロレタリア文学においても同じ階級闘争の拡大が見られ、作品の内容に「出産、妊娠の苦勞、避妊具への欲求まで含まれるようになった。一九一九年に劇作家秋田雨雀はまだ「多くの女性が子供を産んでいる。然し、日本の女性から、出産に関する記録を一度も聞いたことがない」⁽⁶⁾と述べたが、十年後評論家蔵原惟人はプロレタリア文学の多様化を提案し、作家に「産児制限小説」の創作を促した。⁽⁷⁾山川と蔵原の呼びかけに伴い、プロレタリア作家は、作品で八木のように生殖に対する考えの変化を考慮に入れるだけでなく、強姦、不要な妊娠、乳児の夭逝を体験している無産婦人の複雑な現実に応じなければいけなかった。したがって、プロレタリア作家は、こういう体験に基づいて、性暴力や生殖の苦悩に苛まれる無産婦人の間にいかに連帯関係を生み出すかを考慮して作品の筋書きを考えたのである。この作品群は、資本制下の生殖の空虚さと無

益さを訴え、資本制の生命線を切り離すために最も有効な戦略として「出産ストライキ」を提起した。

一九二〇年代にプロレタリア文学が産児制限の題材を導入する背景として、女性の生殖器官や産児調節の科学研究が進んでいることと重なり、プロレタリア運動が生殖へ目を向け始めたことが挙げられる。それまで、日本政府は帝国における生命と生殖の衛生、堕胎の犯罪化、生殖制限の法律を次々制定した。女性の母性や生殖が重視される「良妻賢母」という家父長的な思想のもとに、出生率を上げる人口増加の政策によって国民国家と帝国の建設を強め、生命政治の制度を作り上げた。生命政治の制度は、衛生、医薬、優生学、肉体的または精神的な健康、家族計画など幅広い分野にわたっており、教育、医学、軍隊の様々機関に取り入れられた。一九二〇年代にこういった政策にたいして女性権利を代表する運動が登場すると同時に、女性のリプロダクティブ・ライツの闘争が始まった。その中で、最も活躍していたプロレタリア婦人運動家たちは、階級闘争を女性権利と結び付け、女性の産む権利を要求する無産者産児制限運動を結成した。

プロレタリア活動家はジェンダー搾取に対する抵抗の高潮に応じて、広範囲に及ぶ家父長制の圧制について討論を始めた。⁽⁸⁾ その中で、社会における女性の抑圧やブルジョア家族主義を討論した。近代以前から、女性の自由を制限した家父長制が別の形態ですでに存在していた。そして近代に入り、核家族化によって個人化した女性の主体性が作られ、封建主義からは解放されつつも、自己責任という形で様々な制限が維持されていた。(おもに特権的な)女性にとつては不満や連帯を表現するために、印刷媒体がとても効果的な手段であった。新聞や雑誌などで女性権利と男女不平等について討論することによって、世界の四方八方における女性闘争の時空間を団結した抵抗の集合体に組み合わせただのである。

国際フェミニズムの討論は産児制限や生殖権利などの話題をとりあげるようになった。⁽⁹⁾ 産児制限によってでき

た避妊具は世界中のプロレタリア女性の妊娠や出産の苦しみを可視化（問題視）したと同時に、プロレタリア女性のその避妊具へのアクセス不可も示した。このような話題を紹介された背景には、性とセクシュアリティを研究する精神分析や心理学、第一次世界大戦の余波、ロシア革命、ドイツのワイマール共和国の発足などに関連するトランスナショナルのメディアアスケープがあった。⁽¹⁰⁾この出来事は、ソ連の墮胎の合法化、出生率を引き上げるワイマール共和国の出産促進政策、世界中の産児制限活動家の登場とつながる。産児制限活動家の中では、マーガレット・サンガーが最も知られるようになった。彼女は、一九二二年に東アジアを縦断しながら、大勢の聴衆に産児制限の講演をした。⁽¹¹⁾その上、フェミニズムの活動家は東アジアで翻訳、報道機関、通信、会議などを通じて、活発な議論を交わした。プロレタリア作家や評論家の中でも、秋田雨雀と宮本百合子などはソ連を訪問し、共産主義の産児制限や産む権利を旅行記で紹介した。

東アジアにおいては、山川菊栄が特に有力であり、広く読まれたプロレタリア・フェミニストの一人であった。一九一〇年代から青鞥派の一員としてすでに活躍していた山川は、当時の家父長制を非難しただけでなく、女性対闘争に対するプロレタリア運動の同輩たちの無頓着な態度も批判した。⁽¹²⁾山川にとって、女性教育はただ女性に育児と夫の話し相手を教えるものだった。⁽¹³⁾そして、男性の収入に対する女性の強制的依存性を批判し、それを二重負担の結果としてとらえた。⁽¹⁴⁾この二重負担は資本制が女性身体に与えた仕事、無給の生殖と家事労働による生産を指す。山川は資本制下に女性が生殖と人口政策の道具になっていると主張した。⁽¹⁵⁾山川の批判は女性の生殖器官の搾取を中心にしたと同時に、生殖も資本制のアキレス腱であり、無産階級の抵抗の芽生えとなりうる点を示したのである。

また、女性に対する、ブルジョアの否定的態度を見習った無産階級男性を目標とした山川は、こうした態度がプロレタリアートの男女連帯を妨害しているとも主張した。⁽¹⁶⁾この男女不平等は生物によるものではなく、むしろ性対立から

生じた「社会的、後天的の理由から来たもの」とつづさに説明した。動物世界を分析することで、人間の性差別が動物に欠けており、母系制のほうが多いと論じた。⁽¹⁸⁾ 山川によると、動物でも生殖器官のような生物特性が性別によって異なっているものの、人間だけが女性の生殖器官を悪霊化した。この女性の生物特性は、不潔や劣等なものとして見なされてきた歴史によって、人間の間で生物差異(性差)から生物対立(性対立)へ変化した。⁽¹⁹⁾ 山川は生物特性の中でジェンダー化と階級化された主体性を見分け、こうした主体性を変えるために、この生物特性に付与された権力を咎める必要があると考えた。生物学的性(解剖学上の性)の形成において、男女問わず、身体に無限のスキルを身につけることができると山川は強調した。⁽²⁰⁾ 結局、分業には順応性と偶発性があり、資本制における社会的、ジェンダー的役割も変化しようというのが山川の結論であった。⁽²¹⁾

一方、会員が多いプロレタリア文化運動と違って、プロレタリア産児制限の活動家たちは未組織であり、また小さい研究会だけを設立していた。プロBCに先立って一つの例外は、政治家と生物学者の山本宣治の産児制限研究会であった。一九二三年に大阪で成立されたこの産児制限研究会は主に関西地域の労働者のコミュニティとつながっていた。多くの会員は医者であり、産児制限について講演、避妊具の販売、チラシや小冊子を頒布、『産児調節評論』や『性と社会』などの雑誌を上梓する活動をしていた。産児制限研究会は日本の内地だけでなく、植民地の朝鮮、台湾と満州国まで対象にして、産児制限に関する小冊子を郵送した。産児制限運動家は小冊子の刊行によって人間の身体を資本主義の労働力や生殖力という概念から切り離すことを目指したと同時に、似たような概念で人間の身体を固定してしまった。言い換えれば、産児制限運動家はブルジョア階級の身体や生殖などに関する知識生産を覆そうとした一方、同じような知識をまねる事も多かった。ただ、大きな違いは、支配階級がその知識を縦割りにする社会構造の中で伝えるのと異なり、産児制限に関する知識生産を横断的に提供することが運動家の目標だった点である。

進歩的なソ連でも、産児制限と生殖自決権との間に緊張があった。例えば、ソ連の産児制限を見物しに訪問した英国のプロレタリア作家は、生殖自決権が善悪の諸刃の剣だと論じた。この相互効果はソ連の政府に与えられた生殖の自由によって、婦人解放を進めると同時に、生産と生殖との関係を統制しながら、女性身体を国益に包摂してしまうのである。⁽²²⁾ 東アジアの場合は、生殖自決権がなかったが、プロレタリア運動と国家の女性身体に関わる様々な態度に同じ緊張があった。つまり、ファシズムでも共産主義でも、人間生殖を統制することがプロレタリアートの男女連帯への妨害をつづけた。

一九三一年六月六日に東京で全日本無産者芸術連盟、ナップのもとに、無産者産児制限同盟（プロBC）が正式に結成された。創立大会ではほぼ二百人が集まり、その中に秋田雨雀、江口渙、松田解子などのプロレタリア作家も参加して演説をした。創立後まもなく、プロBCは雑誌、小冊子、産児制限の必携書を出版して、⁽²³⁾ 無産者診療所、保育園と産科施設を立ち上げた。⁽²⁴⁾

プロBCの刊行物を読み通せば、産児制限に関して繰り返されている論点は、マルクス主義と新マルサス主義の主張を混合したものである。経済学者トマス・マルサスの考えを復興させた新マルサス主義思想は急激な人口増加と経済的線形成長の相关性を力説し、困窮拡大を根絶するために家族計画を主張した。新マルサス主義の論点にしたがって、プロBCは生殖中止と産む権利を握る二重戦略の必要性を唱えた。この戦略は、相対的過剰人口に必要とされた人間生殖を混乱させると考えられた。⁽²⁵⁾ プロBCの考えから見ると、資本主義は生殖によってプロレタリアートの内部分裂を計り、相対的過剰人口の貧窮生活を維持して子沢山の家族が他のことに目を向ける余裕を持たないようにしている⁽²⁶⁾と見做された。

若し生んで苦勞(カ)して育てても、そら戦争になると一番先に戦場に引ばり出され肉弾となつて殺されなければならぬ。(中略)それでは資本家に向かつて断固として闘ふのですが、我々が闘ふ為めには子供が多くあつては真当の闘ひはできません。例へは「首を切られたり、賃金をへらされたり」した場合等、皆でストライキを起します。そうして一週間、二週間と闘つてゐるうちには貯金もできない我々ですから、たちまち生活に困つて来ます。そうなれば子供をかゝえて争議をやつてゐる夫のもとへ早く争議をやめて何か仿いて呉れとか、子供がメシがくへぬと押かけて来れば夫は可愛いゝ子供や妻の惨めなすがたをみて、今まで闘つてゐた力もぬけ、裏切つて、皆力を合せて闘つてゐた争議も、ほんの一人が二人のうちざりで、今まで闘つたことが何にもならず、まけてしまうことがあります。⁽²⁶⁾

プロBCの二重戦略は、生殖の中止と産む権利を握ること、剰余価値の(再)生産に最も重要である人間の労働力の流れを乱すことであつた。したがつて、山川菊栄が名付けた「出産ストライキ」の實行によつて資本主義との闘争に勝利し、ジェンダー差別を終わらせることをプロBCは狙つていたのである。⁽²⁷⁾このメッセーは平林たい子や松田解子などのプロレタリア作家の作品にも読み取れると思われる。

二 プロレタリア作家と産児制限の課題

上記は産児制限運動の詳細な歴史ではないが、歴史的な背景として無産階級の性闘争、産児制限、プロレタリア文学の密接な関係を明らかにする。英米文学研究では、文学と産児制限の関係性が分析されたが、東アジア近代文学研

究はこの関係がまだ十分に注目されていない。たとえば、英米フィクション研究において、Widmaier Capo は文学が産児制限の討論に重要な影響を与えたのを明らかにし、⁽²⁸⁾ Layne Parish Craig は産児制限ができた後に計画外の妊娠を語っているテキストはなぜ避妊具が使われていないかまたは失敗したかの理由を説明しなければ、読者を説得できないと述べた。⁽²⁹⁾ この研究は、東アジアのプロレタリア文学でも見られる、避妊政治と文学の結びつきを明らかにした。それに加えて、Aimee Wilson は、こうした相互性を認めたいうえで、一九二〇年代のモダニズムにおける美学が産児制限活動の論点を形成したと同時に、産児制限運動はモダニズムの美学に、特にその主体性の自己判断と固着への否定に大きな影響を与えたと論じた。⁽³⁰⁾ 言い換えれば、人間の自我は前もって推定も固定もされておらず、むしろ社会関係と社会過程の余波によって形成されていくものである。プロレタリア作家も生殖を考え直すことで、ジェンダーもふくめて固定化した主体性の理念を問題にする作品が多い。

新マルサス主義の産児制限、マルクス主義、優生学を根拠にしたプロレタリア作家は妊娠と出産の女性闘争を作品で打ち明けることを狙いとした。こうした物語ではよく妊娠の身体制限の体験が孤独感や精神的苦痛の原因となり、または痛ましい妊娠の場面で新生児と母親が夭折してしまう様子が描出される。だが、Widmaier Capo が指摘したように、フィクションの作品では産児制限の実行が減多に描写されない。⁽³¹⁾ プロレタリア文学も避妊具の使用を語ったことがない。八木のペッサリーの使用と違って、ほとんどの無産婦人は避妊具を購入できなかったからである。避妊具へのアクセスがいかに無産婦人の生活を改善するかに焦点を当てるかわりに、プロレタリア作家は産児制限が必要となる状況を探索した。

プロBCは東アジアにおいて唯一の無産階級の産児制限運動だったが、女性の生殖苦痛をテーマにしているプロレタリア文学作品が夥しく、その作品群が東アジア内と世界中の読者層のネットワークとしてつながっていた。だが、

山川菊栄が論じたように、男性のプロレタリア作家がブルジョアにおける性役割を規範としてしまったため、無産婦人のエージェンシーを見えないようにし、無産階級の女性闘争を家庭や私領域に限定した。この男性作家の偏見によって、女性が絶望的、無力の犠牲者として描写され、無産階級男性間の女性に対する性差別はないがしろにされてしまったのである。

この男性作家の物語を挑むために、女性作家はブルジョアの個人主義とロマンス、または無産者の犠牲化の筋書きに頼ることなく、団体連帯や闘争心をもって新しい舞台を考える必要があった。⁽³²⁾一九三〇年代のアメリカの革命文学に関して、Paula Radinowitz は階級連帯の典型が女性作家に典型的な女人物像を書き換える方法を与えたにもかかわらず、女性の階級意識の主体性を提供する作品を書く場合は、それ以外のイメージも肝心だったと指摘した。⁽³³⁾東アジアのプロレタリア女性作家も階級連帯だけに頼るわけにはいかなかったゆえに、工場や農場以外、家族、出産、セクシュアリティなどの資本制によって疎外される女性の現場に目を向けることにした。⁽³⁴⁾無論、女性に活力与えることは家庭生活上の話に限られるわけではなく、女性のプロレタリア作家は公領域(男)と私領域(女)との空間が劃定される恣意性によって、資本の循環がどのようにプロレタリアートの生命を搾取し、またその生活の様々な空間が生産によってどのように影響されるかを示そうとした。

一九二〇年代に入り、妊娠と出産や育児に関わるテーマの作品が相次いで発表された。その中でも、プロBCの会員であった松田解子の「乳を売る」が最も代表的である。平林たい子は『読売新聞』の「文芸方面における婦人最近の活躍(3)」で、この作品に関して、「幾多の欠点を持ちながらも尚かつ、プロレタリアや婦人の気はくんに反し久し振りに接した喜びを私に感じさせずにおかなかつた」と書いた。⁽³⁵⁾子持ちの主人公光枝は、夫が獄中で、お金がないため、ブルジョアの家族に母乳を売ることにした。毎日六回大量の母乳が搾られ、光枝の子供の分が不足してしまう。その

結果、光枝の子供は非常に痩せて、便秘で苦しんでいる。結局、「光枝の乳が不用になり、光枝が不用になつて、友達宛の手紙では光代は次のような結論に至る。

子供は先づ産まぬこと。出来て了つたら、合法的に殺すか、でなければ徹底的育て上げるかの二途しかないとするが、（私はそう信じてゐますが）後のを選んでゐる私として、現在の生活は全つきり苦痛です。ブルジョアの息子が私の子を食ひ始めてゐる。これは誇張じやないです。プロレタリアの子は皆、此の儘の状態では生れ乍らに彼等の牙の餌食です。『育てたらいゝじやないの。私達の子供として育てゝ行きませうよ。』ソビエツト、ロシヤの孕み女はそう云つて晴やかに笑ふ事も出来ると云ふのに、私達の子供は生れ乍らに母乳さへ奪ひ取られて了つて、ブルジョヤの使ひ古したサルマタの慈善の中か、不衛生な託児所に押し込められて了ふ。それ所か留置場で餓死することさへあるんだものーバカに理屈を並べた様ですが、結局、私は吾々同志の子供の共同養育場を欲してゐるのです。誰かゞ幾人かの子供を衛り育てる。階級的に（家庭的にはなく）です。それに依つて、母親達が、幾度でもしごとに帰る事が出来る様⁽³⁶⁾にです。

光枝は資本主義とブルジョアの搾取者を攻撃する戦略を打ち明ける。女性は子供を産む自決権を獲得し、ちゃんとした環境で子供を生み育てるか、または完全に生殖を停止するか、自分で決めるほかはない。中絶が不可能な場合は、無産婦人が「階級的」に子供を育てるべきだと光枝は主張している。このように、光枝はブルジョア階級の家族主義を否定し、そのかわりにプロレタリアの考えによつて新しい人間関係を提示する。当時はその戦略で資本制の支配下にある生殖の権利を女性に取り戻されると、労働力の流出が危ぶまれ、資本主義の経済構造を覆すと考えられた。

松田以外は、宮本百合子、佐多稲子、平林英子、平林たい子、望月百合子などの多くの女性プロレタリア作家が様々な視点から女性生殖を扱う作品を発表した。それらの作品は、女性闘争を階級闘争と結び付けた。東アジアにおいても、姜敬愛の「地下村」や「塩」、蕭紅の『生死場』や「橋」などの作品では生殖に関わる事が中心となっている。こうした世界の文学動向の中で、平林たい子も例外ではなかった。

三 平林たい子の登場―初期作品と生殖の苦勞

一九二三年のメーデーでピラを配っていた平林たい子と同棲していた相手、山本虎三は検束され、同年の関東大震災の直後、戒厳令下、二人とも予防検束された。東京退去を条件に釈放された後、翌年一月二人で満州国の大連へと渡り、内乱罪予備で検挙された。妊娠していた平林は大連の病院で出産するが、この女兒は栄養不足のため、生まれてわずか二四日目に死亡した。単身帰国した平林は産児制限の活動が高まる状況に注目し、続々に出産に苦しんでいる女性の物語を発表してプロレタリア作家として出発した。東京に戻ると、平林はすぐにプロレタリア文学運動の代表的な作家になり、プロレタリアートの女性闘争の代弁者になった。満州国で過ごした時期に基づいた初期作品の題材は妊娠、出産と子殺しを女性の身体と結びつけて、特に母性、女性性と恋愛の従来理念を疑問にする作品が多い。平林も以前に触れた女性闘争の議論に寄与し、評論でよく無産婦人問題に言及した。コロンタイの『赤い恋』⁽³⁷⁾から関きを得た平林にとって「問題とすべきは、(中略)今日、闘争時代に於ける、無産階級の男女関係について言及しなければならぬ」⁽³⁸⁾のであった。この問題は、資本主義的、ブルジョア階級の封建的な男女不平等が保持されていることから生じたといつてよい。これを変えるために、現在の恋愛の「問題を現実と切り離れた『理想社会』での問題として」

(中略)『限りなき自由』の恋愛でなくつて、闘争によつて限定される恋愛でなくつてはならなく(中略)「相互の闘志を鼓舞し決意を固くさせるものでなければならぬ」⁽³⁹⁾と平林は述べている。また平林は、ブルジョア文壇の婦人作家の「創作の主題にのぼるものは、有産有閑知識階級の、隙つぶしの痴話の報告、食ふ苦勞をも知らぬ文学少女(中略)とばかりの、高尚上品なる恋の打ち明け方の伝授である」と批判している。⁽⁴⁰⁾こうした恋愛物語の消費によつて、資本制のブルジョア階級の恋愛観に対するイデオロギーは読者に受容される。しかし、平林はそれよりも「女性の性なる被征服階級の解放」を達成するために、文学作品は恋愛によるブルジョア階級の男女不平等に反対し、新たな恋愛観を物語に導入すべきだとプロレタリア作家に意見した。

平林の議論は恋愛の批判から性や生殖の批判に及んだ。平林によると、男女不平等は性とながつているためである。男性中心の社会では、女性が非常に抑圧されている。選挙権や「恋愛の自由」だけでなく、「財産上の権利」もなく「夫の不品行に抗議さへ出来ないこととなつてゐる」と平林は述べている。この男女不平等には、国家も良妻賢母によつて強くかかわっている。その関係について、平林は次のように書く。

(前略) 社会には、夫の不品行と花柳病とを助長せしめる公娼といふものがあつて、国家は消極的にこれを奨励して貧苦に苦しむ女性を否心なしに陥れ女性として、堪へるに忍びない労働を強いて女性の天職である(ママ)と云ふの、出産の機能を、めっちゃ／＼躊躇してしまふのです。⁽⁴¹⁾

男女関係は不平等だとしても、これは必ずしも完全に男のせいだというわけではないと平林は論じている。むしろ、「男性をさうさせる、この社会の社会的根柢にある」としている。平林は男女平等の社会をつくるために、男性と手

を組み、資本制の社会構造を変える必要があると主張した。同じように、平林は生殖問題も「社会的根拠」にあると考えている。「貫ひ子殺し、堕胎、産児制限」という随筆では、無産者による貫ひ子殺し事件を分析し、男性の収入が家計に不足しているため、女性も外で働かないといけないことになり、その結果として面倒を見られない子供を生じてしまうと説明している。この場合、無産家族にとつて子供は「首枷」であり、その子供をやむをえず無産者の養父母に手放すが、後者にも負担となつてしまうという悪循環が見られる。平林によると、堕胎事件も同様である。まず堕胎が不法にもかかわらず、「安価な手術者の手を俟たずに、安全に、極秘に、高価な金を払つて堕胎を遂行し得る少数の幸福な婦人等と、母体の過度な労働と休息不充分とで、意志でもない大量的に流産を行ふ無産婦人等とが、対立的に存在して」いるという階級的な差別がある。つづいて、平林は産児制限の話題に移る。産児制限に反対する者の中には、医者も多い。なぜかというところ、堕胎手術で「多額の報酬」を収得にするからである。それ以外、産児制限に反対している最も多い理由は、「産児制限は国家の進展を阻む」原因となることに取り上げられる。平林によると、主に無産者に子供が多いゆえ、その反対論の対象は無産階級である。その上、「資本家的企業には必要欠くべからざる労働予備軍(失業者)及び兵卒の供給者であるこの階級が、産児制限を行うふことは、それらが必要とする資本主義の存立を危くするからである」と平林は明瞭に説明している。平林の論点は、先述プロBCの産児制限反対論にたいする批判と重なることが多い。平林は、だからといって産児制限の賛成者はいつも正しいというわけではないと断言している。一部の賛成論はただ無産者の多産を問題にして、資本主義の経済構造との関係を考慮に入れないからである。つまり、無産階級の出生率が低下すると、無産者の失業や貧困の解決にもなるとマルサス主義の産児制限賛成者は考えている。しかし、この考えの欠点は貧困の原因を資本主義ではなく、無産階級にあることにしてしまう点である。このように資本主義の搾取が「当然化」されると平林は主張している。結局、無産階級に生殖の自決

権を与えるべきであると同時に、子供を産む環境も改善すべきだという要求が平林の論点に見られる。

生殖に関するこうした考えは平林の一九二六年と一九二八年の間に書かれた初期作品にも見られる。その初期作品の中で、「喪章を売る生活」(『大阪朝日新聞』一九二六年一月、のちに「嘲る」に解題)、「投げ捨てよ」(『解放』一九二七年三月)、「治療室にて」と「夜風」(『文芸戦線』一九二八年三月)がよく知られている。それぞれの短編は掲載された後、短編集『治療室にて』として出版された。同時代のプロレタリア作家黒島伝治は、「治療室にて」を次のように評価した。

平林たい子の文章は、何で書いてゐるか？僕は、太った肉体を持つてゐる、その身体で書いてゐる、と思ふのである。(中略)平林の持つてゐる感覚は、きやしやな手をしてゐる、雨風にさらされたことのない、ブルジョアの令嬢が持つてゐる、そういうふ感覚ではない。きれいで、お上品で、すつきりしてゐる、といふやうなものではない。作者は、汚い、よごれ濁つた、醜悪な方面に対して、むしろそれを好むかのやうに、鋭い感覚を働かせてゐる。⁽⁴²⁾

平林の初期作品、「嘲る」、「投げ捨てよ」と「治療室にて」は似た様な経験を持つ主人公を語る作品群である。しかし、この三作を平林のオルター・エゴとして読むかわりに、女性が如何に妊娠を経験し、受け入れるかという問題について三つの可能性を示しているのとらえたい。三人称の語り手の「投げ捨てよ」で光代という主人公が子供を中絶することを考え、一人称の語り手の「嘲る」ではよしこが脚気で子供を亡くした後、どうやって生きていくかを考えるが、「治療室にて」では脚気に罹って妊娠中の光代が出産するかどうか、産んだ後、子供はどうすればよいかを

語る。こうして、身体の運動能力によって意味を作りながら固定された主体性を考え直すということは黒島伝治がいう、平林の「身体執筆」を指しているのではないかと思われる。

四 「施療室にて」と光代の無抵抗的な抵抗

「施療室にて」の冒頭部では、主人公光代が「植民地の空気と、水八分に南京米二分の塩から長い間の悪食」で妊娠脚気に罹ったため入獄を延期し、憲兵隊を後にして慈善病院に戻る場面から始まる。釈放されたということではなく、ただ出産のために施療室に運ばれている。刑務所と病院は、国民国家が利用している、人間を監視することによって主体化する機関である。この機関にいる光代は監視下で身体の動きが制限されている。

光代は同僚の子供が脚気でなくなったことを目撃したものの、最初に自分の脚気を冷静に受け止めた。

無感情の頭の中から、うすい喜びに似たものが微に流れ出した。私は監獄を恐れる。嬰兒を抱いて監獄生活をする女を描いて見ると、内臓が縮むような感じがする。この子供をはじめて腹に抱いたことを知った時にも私は、東京の大地震のどさくさまぎれで監獄にいた。私によって運命づけられた子供の一生は監獄生活かもしれない。いや、しかし、それでいいのだ。私は、額の広い、目の少し吊った女の子をうみたいと思う。よし、日本のボルセヴィチカを監獄で育てよう。⁽⁴³⁾

光代には刑務所がまず恐ろしいものとして見えたが、すぐそのイメージが共産主義者の育児の場所に変わる。だが、

育児するには、夫と一緒にテロ攻撃を企てた三人の苦力はすでに入獄したゆえに、光代は自分以外に頼る人がいない。四人でテロ攻撃の計画を立てる中、彼女は検束されると見抜いて、他の四人に忠告したが、四人は光代「の考を妊娠している女の因循な臆病だと笑った」。この場面で、光代にたいして夫と三人の苦力がジェンダーの偏見を持っていることが示されている。光代の同志である四人の男性が女性を、特に妊娠している女性を、情緒不安定なものだとし、典型的な、女性嫌悪をあらわにしたことで、光代は男性中心のプロレタリア連帯からのけ者にされた。しかし、これですぐ夫を恨まない光代は逆に男社会の男女関係を認めているようにも見える。彼女は「夫に対する妻の道」だとして受け取る。ところが、すぐあと光代は家父長制の支配下にある男女関係の概念を考え直す。

私は左足をのさりと右足にのせて電燈の長いコードを見上げながら夫のことを考へる。夫ではない。同志だ、夫と考へるからこそ色くな不満が引摺り出される。XXとXXを前にした、同志としての男女関係に、あの頼りない一本の綱に皆が縋らうとする古い家族制度は去年の雑草のやうに枯れてゐる筈だ。しかし球の大きい緑の黒い眼鏡が吸い上げやうとする様に、背の低い私を見下ろしてゐる。⁽⁴⁾

光代は女性が男に支配されている古い家族制度を問い直してみる。プロレタリアートの活動家にとってこうした人間関係は保守的であり、その代わりに同志の中で、男女平等に基づいた新しい関係性や恋愛を模索している。だが、光代の夫は社会主義者の同志として理論的に男女平等の概念に賛成しているかもしれないが、女性に対しての古い家族制度の考えをまだ有している。以上の場面の続きでは、光代と夫が刑務所で再会し、夫が、その古い家族制度の考えをあらわにしている。

「光代、許してくれよ。うまれる子供とお前に、俺は一番すまなく思ふよ、俺が悪かった。」下を向いてゐる眼鏡に目から一滴の雫が落ちてばつと拡大される―それは、昼間憲兵隊の廊下で鎖につながれた夫に会つた時の光景だ。私は、何か顔を掩つてしまいたい衝動を感じる。

何が彼にあんな未練の糸につながれた女々しい態度をさせるのであらうか。彼の充血した目は、一体私に何うせよと要求してゐるのだ。

妻の存在が、意志の弱い夫を未練につなぎとめる。未練の夫が投げて来る長い帯の端を、妻は受取らずには居られないのだ。あゝいやだ、いやだ。どこがへ落ち込みさうで堪らない気持ちだ。寄木細工のやうにがら／＼に崩れてしまひたい。⁽⁴⁵⁾

光代の夫は謝罪によつて、同志であることを強調し、光代がか弱い女性であるため、自分に頼るほかないという誤つた考えを抱いている。夫に対して、違和感を抱いている光代は二人のプロレタリア的な恋愛観がかみ合わないことを嘆息している。平等な同志として資本主義と帝国主義と闘う代わりに、妻を支配する夫の態度が光代に自分の存在を崩れてしまひたいと思わせ、固定的な主体性からの逃走線を探求させるようになる。その後、光代はこのことを「私は、私の中に、消えなんとして、いつも焔を取り戻してくる一本の蠟燭の火を見守」というふう⁽⁴⁶⁾に説明する。彼女は自分を「塩辛い涙」で清め、夫の古い家族制度に包まれた主体性の皮を剥くように、自分の立場を変えようとする。

次の日に、光代は目を覚ますと、ひどい疼痛を感じる。陣痛に襲われる光代は、「自分の凄惨な野獣のやうなうな

り声を残忍に聞き入り、「愛する夫と引裂かれてこんな植民地の施療病院で誰にも見とられずに野良犬のやうに子供をうむ自分の不幸を嘆いてはならない」と出産を描出している。夫との同志関係が破れてしまい、避妊具もなく中絶もできない光代は子供を産む無益さを感じてもなお、「猿のやうに赤い女の児を」産むしかない。自分が「ひどい脚気に」に罹ったあわれみを看護婦長に乞うが、後者は無関心でただ「だいじょうぶですよ」と答えた。光代のやうな脚気患者は「市から下りる補助金を私生活の方へ繰りこみたい」病院長に「迷惑」だと思われる。こうした嘆かわしい環境で子供を産んだ光代は、面倒を見る余裕がなく、「一番恐れていた「愛」というやうな感情は少しも起こってこない」と新生児の出産を経験している。つまり、資本制と家父長制の支配下で子供を産むことを余儀なくされても、その子供を愛しながら育てるのが不可能だと光代はわかった。

孤独な光代は出産後、牛乳または人工栄養にかかる費用が高いため、脚気に罹った母乳を子供に飲ませるかどうか悩んでいる。恐ろしい刑務所や施療室で自分の死んでいるイメージが光代の中に束縛された体を解放する意志をかき立てる。女性の患者より菓の値段の方が高いという施療病院の看護士たちが話しているのを盗み聞きして盗み聞きしてから、光代にはもう限界がきて、「子供に濁った乳を飲ませると決心した」。

恐しい勢いで乳汁が流れ出す。乳の張る痛みが、朝になると肩まで遡って来た。体の一部に膿を持つてゐる氣持ちだ。夜中に二回子供に乳首をふくませたが舌と咽喉の吸引力が快く乳首から乳汁を誘い出す。

乳を吸はてゐる氣持ちは、軽い睡気に押揃されてゐるやうに快い。これが母親の氣持ちのはじまりに違ない。

恐しく快い朝がやつて来たものだ。乳の下まで痺れが上つて来た体が膚にキツチリした羽二重の肉シャツをつけてゐるやうになめらかだ。⁽⁴⁶⁾

母乳を子供に飲ませている光代は自分の身体を強く体感し、身体が快感と疲労感で同時に劈かれていると感じる。こうした快感は長く続かないが、光代の母乳は「膿」のように子供を汚してしまう。それにしても、貧乏な農民の祖先のように子供を食わしていることは光代を安心させた。「法律は、囚人である母親」と嘆いている光代は法律によって意味づけられた身体を変えようとするが、その絶対的な法律の外部に立って、新しい主体性の意味が考えられないという「自覚が、私を絶望させる」結論に至る。脚気で濁った母乳を飲んだ子供はまもなく死んでしまい、光代の個体化された主体性を裂開させる。

母親であることがほんのわずかの間だときづいた光代は「過去と未来とを切り落とした、平面な、一枚の紙のような自分を感じる」。子供の死のトラウマで時間というものをくずしてしまう光代の身体は固定した状態から流動的になる。襲のように、光代は自分の身体を折りたたんで、主体性の壁を壊し始める。膚にきっちりした「羽二重の肉シヤツ」をひらいて、多様に変化する身体を発見することで、資本主義と家長長制によって個体化された主体性からの逃走線を見つめる。肉体の身体はまだ刑務所に拘束されているが、家長長制に束縛された女性たちとの連帯感を表現することを通して、仮想的な、別の世界の表象を可能にしている。女性の同志に向けて、光代は「女よ、未来を信じろよ。子供への愛が深いならば、深いゆえに、闘いを誓え。」と言い出す。ブルジョア家族主義と違うプロレタリアー卜の人間関係が身体の生成変化によって固定された主体性を破壊し、性別問わず人間に数えきれない多多元性を齎すと光代は主張している。

本稿の冒頭でも少し触れたが、平林の初期作品の先行研究は少なくはないにもかかわらず、「施療室にて」を中心にした論文は数編しかない。戦後に入り、同時代作家、壺井繁治は「平林たい子論」では「施療室にて」の主人公光

代はなぜ病院に医員たちに抵抗しなかったか、子供に濁った母乳を飲ませたのかと疑問を呈している。⁽⁴⁷⁾その論点の延長で、駒尺喜美は主人公光代がなぜ「牛乳を断言」し、「簡単に諦めてしまう」のかと問いかけている。⁽⁴⁸⁾このように、「深いニヒルが被い、難く露出してしまっている」が、「絶望と意志、虚無と目的意識とが（中略）むしろリアルなもの、一種の魅力を感じる」と駒尺は書き加えている。宮本阿伎は光代が完全な無抵抗よりも、「心から抗議しているゆえに描写に説得力がある」と論じている。同時に、その内心の抗議に対して、「人々と連帯してたかう視点をいっさい追い詰めている」と光代の闘わない場面を強調している。

間違いなく、光代は周りの「人々と連帯」することはなかなかできない。「無感動な」看護婦や老人と娼婦あがりの患者たちと関係を作れていない。だが、先に引用した部分で見られるように、周りの人々より、世界中の女性同志と連帯を感じている。しかし、この連帯感よりも、ここで強調したいのは、光代の無抵抗が一つの抵抗の方法だということである。つまり、病院の医院たちに迫らないで牛乳も頼まずにそのまま脚氣に罹った母乳を子供に飲ませた行為は、生殖そのもの自体に反対していなくても、資本主義と家父長制の社会では生殖が完全に無効になってしまうことを示す。その態度を以って、資本主義と家父長制の搾取に抵抗することはただその制度が作った社会構造の中にとどまるゆえに、子供の死亡で生殖を中止し、つまりはその社会構造へ無抵抗という形を取ることによって、その社会構造を否定し、一旦制度の外部に留まることを意味する。言い換えれば、社会構造を否定すること、それに抵抗することも否定するという二重否定で無抵抗というスタンスがもう一つの抵抗の方法になり、それは無抵抗的な抵抗とでもいえるだろう。

子供が亡くなった後、光代は施療室の看護師たちが子供の命を救うことにどれだけ努力したかと疑問に思っている。医者たちの解剖結果によると、ただ栄養不足を原因にして乳児脚氣で亡くなったと判断した。医者たちは医学界に「脚

気の乳を警戒せよ、母親が脚氣の時には、子供は、乳母または、人工栄養をもって育てざるべからずという」ことを教える。けれども、人工栄養のお金を持たないプロレタリアートがどうすべきか、光代の「子供の死骸の解剖から導きだすことができない」と光代は知る。資本主義と家長制に固定された主体性を解放した光代は刑務所にもどって、女性闘争と階級闘争を続けるというところで短編が終わる。

おわりに

本稿では、平林たい子の「施療室にて」における主人公光代と生殖問題を検討し、かつて指摘されなかったプロレタリア文学と産児制限との相互関係を明らかにした。一九二〇年代に、無産者産児制限の活動家はプロレタリアートの中で産児制限を広めたと同時に、プロレタリア作家たちは、無産婦人の妊娠と出産の苦しみを問題視した。このように、無産者産児制限運動とプロレタリア作家は相互に影響を与えた。平林の「施療室にて」は、本稿の最初にとりあげた八木さんの成功した避妊と違って、産児制限そのものを描写しなかったが、生殖に関わるプロレタリア女性の苦しみを語ることによって、産児制限の必要性を訴えた作品であると考えられる。資本主義の社会構造において、生殖が直接に剰余価値の(再)生産に関わっているので、生殖そのものが資本主義に支配されるほかならないと主人公光代は示している。その上、家長制は、「良妻賢母」の理念通りに、女性の生殖役割を維持し、それ以外の主体性を制限する。光代はその支配から逃れるために、生殖の中止、産む権利を握ることで、女性の固定された主体性を解放し、未知の主体性を探索するよう、プロレタリア女性に呼びかけた。

〔注〕

- (1) グプタ・スウィーティ『平林たい子 社会主義と女性をめぐる表象』（翰林書房、二〇一五・九）46頁〜47頁。
- (2) 岡野幸江「平林たい子の労働小説——階級・性・民族の視点から」（『国文学 解釈と鑑賞』二〇一〇・四）105頁。
- (3) 倉田容子「理智」と「意志」のフェミニズム——平林たい子の初期テクストにおける公／私の脱領域化——（『日本文学』二〇二〇・一一）、3頁。
- (4) 上野千鶴子『家父長制と資本制——マルクス主義フェミニズムの地平』（岩波書店、一九九〇・一〇）10頁。
- (5) 山川菊栄の産児制限論に「こころは」、Sujin Lee, “Differing Conceptions of ‘Voluntary Motherhood’: Yamakawa Kikue Birth Strike and Ishimoto Shizue’s Eugenic Feminism,” *U.S.-Japan Women’s Journal* 52, no. 1 (2017): 3-22 に詳しい。
- (6) 秋田雨雀「藤森成吉君の芸術」（『前期プロレタリア文学評論集』新日本出版社、一九九〇・一〇）105頁。
- (7) 谷本清（蔵原惟人）「芸術的方法についての感想」（『ナック』一九三二・九）18頁
- (8) この議論に「こころは」、Ayako Kano, *Japanese Feminist Debates: A Century of Contention on Sex, Love, and Labor* (University of Hawai‘i Press, 2016) に詳しい。
- (9) Paula Rabinowitz, *Labor & Desire: Women’s Revolutionary Fiction in Depression America* (University of North Carolina Press, 1991), 5.
- (10) ソ連とドイツのワイマール共和国の産児制限については Susan Gross Solomon, “The Demographic Argument in Soviet Debates over the Legalization of Abortion in the 1920s,” *Cahiers du Monde russe et soviétique* XXXIII, no. 1 (1992): 59-82. Atina Grossman, *Reforming Sex: The German Movement for Birth Control and Abortion Reform, 1920-1950* (Oxford University Press, 1998) を参照。

- (11) マーガレット・サンガーと彼女の東アジアでの受容については、陳永生『中国近代節制生育史要』(蘇州大学出版社、二〇一三・八) 83頁〜100頁、金子幸子「近代日本における西洋女性論受容の方法——マーガレット・サンガーの産児制限論を中心に」(『社会科学ジャーナル』一九八八・三) 61頁〜80頁に詳しい。
- (12) 山川菊栄と青踏社との関係については、Jan Bardsley, *The Bluestockings of Japan: New Woman Essays and Fiction from Seido, 1911-16* (University of Michigan Press, 2007) に詳しい。
- (13) 山川菊栄「いわゆる新良妻賢母主義」(『山川菊栄女性解放論集1』岩波書店、一九八四・四) 104頁〜105頁。
- (14) Leopoldina Fortunati, *The Arcane of Reproduction: Housework, Prostitution, Labor, and Capital* (Autonomedia, 1995), 9.
- (15) 山川菊栄「婦人解放と産児調節問題」(『山川菊栄女性解放論集1』岩波書店、一九八四・四) 292頁。
- (16) 山川菊栄「プロレタリアと婦人問題」(『山川菊栄女性解放論集2』岩波書店、一九八四・五) 31頁。
- (17) 山川菊栄「男性優越の歴史的発達」(『山川菊栄女性解放論集2』岩波書店、一九八四・五) 46頁。
- (18) 同右43頁。
- (19) 同右46頁。
生物差異(性差)から生物対立(性対立)へ変化については、Elisabeth Grosz, *The Nick of Time: Politics, Evolution, and the Untimely* (Duke University Press, 2004) を参照。
- (20) 山川菊栄「男性優越の歴史的発達」47頁。
- (21) 同右52頁。
- (22) Julia Chan, "The Brave New Worlds of Birth Control: Women's Travel in Soviet Russia and Naomi Mitchison's *We Have Been Warned*," *Journal of Modern Literature* 42, no. 2 (2019): 40.

- (23) 新興医師聯盟『無産者衛生必携』（叢文閣、一九三二・二）と無産者産児制限同盟『プロレタリア産児制限法』（耕進社、一九三三・二）を参照。
- (24) 無産者診療所については、中小路純『千葉県北部無産者診療所物語』（本の泉社、二〇二二・二）を参照。
- (25) 無産者産児制限同盟『無産者産児制限とは何か——どんな避妊方法があるか』（プロBC・リフレット第1輯、一九三二・六）3頁～5頁。
- (26) 同右。
- (27) 同右6頁～8頁。
- (28) Beth Wildmaier Capo, *Textual Contraception: Birth Control and Modern American fiction* (Ohio State University Press, 2007), 5.
- (29) Layne Parish Craig, *When Sex Changed: Birth Control Politics and Literature between the World Wars* (Rutgers University Press, 2013), 2.
- (30) Aimee Armande Wilson, *Conceived in Modernism: The Aesthetics and Politics of Birth Control* (Bloomsbury, 2016), 4.
- (31) Capo, *Textual Contraception: Birth Control and Modern American fiction*, 7.
- (32) Rabinowitz, *Labor & Desire: Women's Revolutionary Fiction in Depression America*, 70.
- (33) 同右 71。
- (34) 同右。
- (35) 平林たい子「文芸方面における婦人最近の活躍（3）」『東京朝日新聞』朝刊、一九二九・八・二七）5頁。
- (36) 松田解子「乳を売る」『女人芸術』一九二九・八）23頁。

- (37) 平林たい子「コロンタイ女子の『赤い恋』について」『文芸戦線』一九二八・二) 190頁〜191頁。
- (38) 平林たい子「最も新しい恋愛」『文芸戦線』一九二七・九) 85頁。
- (39) 同右。
- (40) 平林たい子「婦人作家よ、娼婦よ」『文芸戦線』一九二五・九) 7頁。
- (41) 平林たい子「女性の同志よ!―婦人同盟について―」『文芸戦線』一九二七・八) 68頁。
- (42) 黒島伝治「施療室にて」――平林たい子短篇集――」『文芸戦線』一九二八・一一) 61頁。
- (43) 平林たい子「施療室にて」『文藝戦線』一九二七・九) 142頁。
- (44) 同右144頁。
- (45) 同右。
- (46) 同右152頁。
- (47) 壺井繁治「平林たい子論」『新日本文学』一九五二・三) 74頁〜79頁。
- (48) 駒尺喜美「施療室にて」(平林たい子)『国文学―解釈と教材の研究』一九六八・四) 57頁。
- (49) 同右。
- (50) 宮本阿伎「近代文学探訪(35)平林たい子「施療室にて」」『民主文学』一九九九・三) 138頁。
- (51) 同右。

〔付記〕 本稿は、第四十四回国際日本文学研究集会(国文学研究資料館主催、令和三年五月)における口頭発表の原稿を基に改稿したものである。

